

チェン イエ  
氏 名 CHEN Ye  
学位の種類 博士（工学）  
学位記番号 博第1186号  
学位授与の日付 2020年9月16日  
学位授与の条件 学位規則第4条第1項該当 課程博士  
学位論文題目 建築物の言語描写における〈中国らしさ〉の多態性の変容  
(Transformation of Polymorphism of "Chineseness" in Text  
Description of Buildings)

論文審査委員 主査 教授 北川 啓介  
教授 麓 和善  
准教授 夏目 欣昇  
教授 村上 心  
(椋山女学園大学)

## 論文内容の要旨

数千年前から現在まで続く中国文明において、悠久の歴史の中で生まれた多くの文学作品、森羅万象についての解釈から生まれた玄学思想、儒家思想が提唱する中国の礼式、度重なる動乱の時期と宗法制度によって蓄積された内向的な国民性、人の美意識や世界観が表れた伝統絵画などは、今でも知らず知らずのうちに人々の生活のあらゆる側面に影響を及ぼしている。このような環境で設計活動を行う設計者は、多様な中国固有の事象を独自に解釈し設計に反映させているため、建築物は多様な様相を示している。

また、1949年の中華人民共和国設立以降、設計者の建築物の中国らしさに対する探求は長期にわたって続いた。2000年頃から、外国人建築家が中国の建築市場で活躍し、建築思潮に対して強く影響を与えた。多数の中国人建築家による反対があつたにも関わらず、外国人建築家によって設計された中国国家大劇院が建設され、当時の中国の建築界に大きな議論を起こしたことは顕著な例である。この事例は設計者の建築物の中国らしさへの探求において、改めて中国らしさを捉え直す大きな機会となった。1950～1990年代は中国以外の文明の存在を強く意識しながら建築物の中国らしさを探求し始める時期であることに對し、2000年以降は中国の建築市場において外国人建築家が大規模に参入することで現れた異なる価値観が建築物の中国らしさに対する新たな解釈を促す時期である。また、1950～

1990年代は建築物の文化的なアイデンティティが政府や建築界で強く求められていたことに対し、2000年以降は比較的自由に設計者個人の意思により中国らしさを探求している。1950～1990年代と2000年以降は、中国以外の文明が中国らしさの探求に与える影響が異なり、また中国の建築界における中国らしさに対するこだわりも異なることから、それぞれの時期の建築創作における中国らしさにも異なる特徴があると考えられる。

本論文は、建築物の解説文の中から、建築と関わる中国的事象を示す様相を<中国らしさ>とし、それを設計者が独自に解釈し、設計の根幹とすることで建築物に表出する多様な性質である<中国らしさ>の多態性について論じる。また、社会背景が異なる1950～1990年代と2000年以降をそれぞれ考察して比較することで、各時期における<中国らしさ>の多態性の特徴をより明確に把握し、社会背景が建築創作における<中国らしさ>に与える影響を考察する。

本論文は以下の6章により構成される。

第1章では、研究の背景、目的と意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第2章では、研究の理論として、分析についての考え方を示し、分析対象資料の位置づけを整理した。次に、研究の進め方として、課題の検討と分析方法を設定し、研究の流れを整理した。

第3章では、1950～1990年代の事例に着目し、中国の政府や建築界が建築物の中国らしさに強いこだわりが続く社会背景における建築創作における<中国らしさ>を考察した。まず、中国的事象と性質、建築物の構成要素と操作それぞれのクロス集計結果をもとにコレスポネンス分析を行い、1950～1990年代の設計者が着目した<中国らしさ>と<中国らしさ>を意図した設計手法の傾向を考察した。これらを踏まえて、1950～1990年代の<中国らしさ>の多態性の類型を導出した。さらに、中国文明の経緯により類型の特徴を考察し、事例の地域分布と時期分布を基に社会背景に合わせて導出した類型を論じた。

第4章では、2000年以降の事例に着目し、他文明の価値観の影響がそれまでの中国らしさへのこだわりに対する再考を促す社会背景における建築創作における<中国らしさ>を考察した。まず、中国的事象と性質、建築物の構成要素と操作それぞれのクロス集計結果をもとにコレスポネンス分析を行い、2000年以降の設計者が着目した<中国らしさ>と<中国らしさ>を意図した設計手法の傾向を考察した。これらを踏まえて、2000年以降の<中国らしさ>の多態性の類型を導出した。さらに、中国文明の経緯により類型の特徴を考察し、事例の地域分布をもとに社会背景に合わせて導出した類型を論じた。

第5章では、第3章と第4章で導出した1950～1990年代と2000年以降の各時期の建築創作における<中国らしさ>の多態性を総合的に比較考察した上で、時期による相違を促した社会背景や要因の考察と合わせて、建築創作における<中国らしさ>の変容を論じた。

第6章では、以上の分析の流れと結論を総括すると共に、今後の課題と展望を示した。

本論文は、建築物の解説文の中から、建築と関わる中国的事象を示す様相を〈中国らしさ〉とし、それを設計者が独自に解釈し、設計の根幹とすることで建築物に表出する多様な性質である〈中国らしさ〉の多態性について論じている。また、社会背景が異なる1950～1990年代と2000年以降をそれぞれ考察して比較することで、各時期における〈中国らしさ〉の多態性の特徴をより明確に把握し、社会背景が建築創作における〈中国らしさ〉に与える影響を考察している。

本論文は以下の6章により構成されている。

第1章では、研究の背景、目的と意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第2章では、研究の理論として、分析についての考え方を示し、分析対象資料の位置づけを整理した。次に、研究の進め方として、課題の検討と分析方法を設定し、研究の流れを整理した。

第3章では、1950～1990年代の事例に着目し、中国の政府や建築界が建築物の中国らしさに強いこだわりが続く社会背景における〈中国らしさ〉を考察した。まず、中国的事象と性質、建築物の構成要素と操作それぞれのクロス集計結果をもとにコレスポネンス分析を行い、1950～1990年代の設計者が着目した〈中国らしさ〉と〈中国らしさ〉を意図した設計手法の傾向を考察した。これらを踏まえて、1950～1990年代の〈中国らしさ〉の多態性の類型を導出した。さらに、中国文明の経緯により類型の特徴を考察し、事例の地域分布と時期分布を基に社会背景に合わせて導出した類型を論じた。

第4章では、2000年以降の事例に着目し、他文明の価値観の影響がそれまでの中国らしさへのこだわりに対する再考を促す社会背景における〈中国らしさ〉を考察した。まず、中国的事象と性質、建築物の構成要素と操作それぞれのクロス集計結果をもとにコレスポネンス分析を行い、2000年以降の設計者が着目した〈中国らしさ〉と〈中国らしさ〉を意図した設計手法の傾向を考察した。これらを踏まえて、2000年以降の〈中国らしさ〉の多態性の類型を導出した。さらに、中国文明の経緯により類型の特徴を考察し、事例の地域分布をもとに社会背景に合わせて導出した類型を論じた。

第5章では、第3章と第4章で導出した1950～1990年代と2000年以降の各時期の建築創作における〈中国らしさ〉の多態性を総合的に比較考察した上で、時期による相違を促した社会背景や要因の考察と合わせて、建築創作における〈中国らしさ〉の変容を論じた。

第6章では、以上の分析の流れと結論を総括すると共に、今後の課題と展望を示した。

以上は、建築学における近代と現代の思潮の潮流をひとつの国らしさに着目し、建築計画の観点、建築意匠の観点、建築技術の観点といった多角的に論じており、社会に根ざした建築学の国際的な側面を示した貴重な論文である。上記の内容は、日本建築学会計画系論文集への2つの審査付論文として掲載に至っており、審査の結果、博士論文として相応しいと判断した。